5

部落問題文芸・作品選集

別巻

部落問題文芸・作品選集

第5巻

正岡子規　曼珠沙華

中谷無涯　かるかや物語

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第五巻

昭和四十八年七月十六日発行　定価一、三〇〇円

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話（〇三）（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四（夜間）
振替　東京　七八四九八番　〒一五二

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

曼珠沙華

一

車馬雜鬧の處ではなく、本通の曲り角に方一町を塗塀に圍ひ廻して、表はいかめしき格子造、左の方へ曲れば外より見ゆる家藏、棟と棟とを竝べて數知れず、右の方へ曲れば檜皮葺の門、常はしめきりて、猶裏の方にも通用門をつけ、年が年中人の出入の絶えぬ、これが昔より御領内第一の富豪と聞えた野村治右衞門の家構である。殿樣は御國替になる、藩主が縣令になる、縣令が縣知事になる、城下目拔の武家町は崩されて停車場になる、三年見ねばがらりと變る世の中に、三百年來の野村治右衞門は、昔から此名、昔から此家、昔から此財産、藏の壁に附けてある桔梗の紋は此處の名物の隨一と言はれて、變らぬ者の譬に引かれる位であつた。山の者、村の者が城下見物に娘子供を連れ立ちては、必ず此家の前に立ちどまりて、面白さうに奥を覗くがきまり

で、こゝの桔梗の紋と山本村の地藏樣の數とは今迄數へた者が無い、と物知り顏にいふて聞かせるのが親の自慢であつた。野村の內には、大阪もあるさうな、東京もあるさうな、日本三景も一目に見えるさうな、極樂がこしらへてあつて天人も舞ふて居るさうな、此中には凡そ人間が欲しいと思ふ程の者皆出來て居るさうな、と誠らしく言ふ者もある位の繁昌であつた。

聞けば極樂とて羨ましいが、さて極樂に住む身は、衣食住の樂みといふ事も無ければ、蓮の花が四時咲き通しで、迦陵頻迦が晝夜啼きつゞけでは、まさかに善導が法然でも飽きたまはぬ事はあるまい。況して凡夫の悲しさは、貧乏は金持を羨み、下役は上役をねらひ、位高く官高き者は品格を保つて行かんならんが爲に思ふ存分の道樂が出來んとて愚癡をこぼして居る。いづれにしても變化なき生活が感情の强い者に不愉快を與へ、窮屈に束縛せられたる境遇が才の走つた者に不平を起さしむるのであらう。野村の家の總領息子、名さへ玉枝とて女のやうな優しい生れ、今年十六七の花盛りに、固よりかしこく慈悲深く、學問さへすぐれて居るので、此家に此子、未來の治右衞門のおひさき見えて野村の礎はぐすとも言ふまい、と人は皆譽め羨めど、何がどうしたか、玉枝の塞ぎ樣、朝から晩迄物も言はねば笑ふでもない、苦蟲踏潰したといふ顏つきで默つて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ぼんやりと机にもたれて居る、机に凹みが出來はせんかと思はれる程で。乳母は晝飯の膳を下げに來て、どこぞ御氣分が惡うございますか。と尋ねた。これは毎日斯ういふて聞くので今日も聞いたのだ。玉枝も毎日聞かれた時のやうに今日も默つて居る。

此頃は御膳も進んではあがりませず、學校からも早う戻んておいでなさる、お内でも前方のやうに御本を御覽になるでもないし、それに夜は十二時迄も御目ざめの御樣子には見えまするし、お父樣にしてもお母樣にしても是程とは御存じありますまいが、若し御存じになりましたら、どの位御心配なさいますか知れませぬ。

乳母は眞心をあらはして言ふたけれど玉枝には聞えなんだと見える。

此間も學校への御出がけに内の黑犬の後つけて來るが憎いとやらで、血の出る迄杖でお打きなされたと勝が申して居りました。今迄蟲一つお殺しもなされぬ若旦那樣が左樣な事をなされますといふは、餘程お氣が立つて居るのであらう、と勝でも申します。それといふも矢張お加減の惡い故でございませう。どうも此頃のお顏の色は平常ではございません。

玉枝は默つて居る。

若し深い譯も無しにつまらんといふやうなお考へでもございますれば、何樣な面白い事でも

なされたらどうでございませう。出來ん事の無い御身分で、たとへ天下中の綺麗女子を皆連れて來てお側にお置きなさらうが御勝手でございます。此お家でつまらんと言ひましたら、唐天竺を鐵の草鞋で探したけれてゝ面白い事はありますまい。

心ありげに乳母は少し笑ひかけたので玉枝はいよ〳〵うるさくてたまらん、と言ふ風で立ち上るや否や出て行かうとした。

何處ぞへお出かけなさいますか、表へ出ておいでなされたらお氣が晴れて宜しうございます。お著物はそれではいけません。お服でも出しませうか。

二

ジャケツに竹の鞭、子供らしき打扮に、何やらいふ乳母の言葉を聞き捨てゝ裏門より逃げるやうに飛び出したが、町はづれの小社の後へ來て、ほつと息をついた時、玉枝は始めて自己を知覺した樣子であつた。

見渡せば稻田遠く西に開けて、南を劃る一帶の土手は松、楢、榎など枝を參へて森の如く茂つ

て居る。監獄署の高き白壁と黍畑との間の小道を通り抜けて土手へ取りつくと、少し心が落著いたので、下闇をぶらり〳〵と草木など鞭で叩きながら歩行いて居た。名高い化地藏の前へ來ると子供心に恐ろしく思ふて居た名殘で今も氣味が惡いけれど、一足横へ踏み込んで其前へ往て見た。いつでも此地藏の首は前の方に轉がつた儘であるのが、今日は首が胴に載せてある。載せてはあるが眼口鼻が見えぬので若し石ころではあるまいかと猶近よつて見て玉枝は覺えず笑ひ出した。首は横向いて著いて居る。思はぬ處で地藏に笑はされてから後は獨り歩行いて居ても何か分らぬが無暗にをかしい。いつでも走つて通り抜けて居た墓原へ來ても恐ろしくはない。赤い信女が鄰の怪しき居士の膝に倒れかゝつた儘、そこを枕に寢て居るもをかしい。新墓の供物をつゝいて居た鴉が人影に驚いて樹の枝へ飛び上り何やら喰ふて居た物をつい取り落してそれを拾ひにも得下りず惜しさうに阿房々々と鳴いて居るのもをかしい。日頃玉枝の胸の中にかたまつて居た鬱結は此日此時一時に笑ひとなつて蒸發し了つた。向ふの紙漉場に干してある紙が木の間に白く見えるのも愉快、あちらの村社に二三本幟が立つて居るのも愉快、知らぬ鳥が鳴いて居るのも愉快、小さき蟲の飛んで居るのも愉快、若し周圍の萬象に靈魂があるならば彼等は今たしかに玉枝を中心にして活動し始めたのであらう。

ふつと耳を貫く音に立ちどまつて見廻せばいつか三の淵に來て居る。玉枝は何か急に思ひついたやうに、彼處の木の間、此處の草むらと、道無き處を探し歩行いたが、終に堤の林を離れて田の縁に出た。返さうとして彼方を見れば土手を十間許り離れて田の中に一塊(かたまり)の高まり、何とも知れぬ大木一株(もと)雲に聳えて、其下には今を盛りの曼珠沙華が透間も無く生えて居る。それが傾く西日に映りて只赤毛氈を敷きつめたやうな。其中に坐つて何やらして居る一人の小娘を見つけたので、あれに聞いて見ようかと獨り言して畦道づたひに小高き處をぐるりと廻りて、少女の後からそつと覗いた。乞食でもあらうか繼ぎ〳〵のきたない著物に、帶は何やらの片側に赤き唐縮緬をつけたのを繩のよれた如く結び、髪は只やたらに束ねて居た。足投げ出して居る側に草花少し入れた籠を置き、そこらにある曼珠沙華を搓りては餘念なく絲で縛つて居る。

玉枝は後よりだしぬけに、

オイ。

と驚かした。驚いて振り向くだらうと期したるに違ひて、聞えたか聞えぬか、少女は返事さへせぬ。

こゝらに昔の大將の討死したといふ塚があつて石が立つて居るといふのはお前知らんか。

と問へば、

此石より外に石の立つとる處は知らんがなァ。

と顯で敎へながら、手に持つた花束を腹立たしげにぐしや〳〵と揉み潰して、玉枝の足もとへ投げ出した。見れば大木の根元に立つたる石碑、これにかあらんと玉枝は裏表幾度となく見たが、苔蒸し石虧けて一字も讀むことは出來ん。爲ん方なさに一足後へ戻りて少女を見れば、投げ出した左の足の拇指の尖、石抔に躓きてしたゝかに傷つたと見えて、足首のあたり迄血に染みて今も少しづゝ流れて居るけれど、それも知らぬ態で只花を束ねて居る。

初めは殘酷なやうに思はれたが、自分が平氣で居るのは心に氣高い所があるかとも思はれて、何とはなしに去りかねて、佇んだまゝ何をするかと見つめて居た。女は花籠にある賣れ殘りとおぼしき桔梗の莟を搖つては一つづゝ絲にてくゝり合せ又くゝり合せて、それを圓く玉のやうにしようとして居る。玉枝は其成功を見る迄と、側に立つて居るが、女はそれには頓著せぬ、寧ろそれを知らぬのでもあるらしい。やがて桔梗の花束は餘程出來上つたが、今一つ二つ花が足らんので、籠の中を探したが、もう花は盡きてしまふた。女が困つて居るのを見て、先より此花束に同情を表して居た玉枝もひどく心で困つて、どうかして助けてやりたいと思ふて居る內、ふと思ひ

出して自分の帽子に挿んで居た桔梗を默つて女の前に投げ出した。女はそれを默つて拾ふて　や

う〳〵花束を完成した。それを手の上に轉がしながら女は一寸玉枝を見あげてにつこり笑ふた。

玉枝の體にある總ての神經が一時に物に感じたやうに動いた。此時初めて女の顏を見たが、年は十五六でもあらうか、眼圓く鼻低く、赤き脣、白き齒、善き容貌にはあらで、恐ろしと見える處もあるが、肥えたる薄赤き頰の眞中に靨をこしらへて笑ふと、言ふに言はれぬ一種の愛嬌がこぼれて、それが人の心を穿つ程の力を持つて居る。

玉枝は好奇心と魔力に打たれて見て居たが、頻りに桔梗の玉がほしくなつたので、買ふて取らうと思ふたけれど、生憎金を持つて來なかつた。どうしようともぢ〳〵して困つて居たが、

其桔梗くれんか。と試みに言ふて見た。

女は何も言はずに花を草の上へ轉がしたまゝ見向きもせぬ。大方吾に取れといふのであらう、と推して玉枝は急いで拾ひあげた。毘沙門樣のお圖にでも中つたやうに嬉しさうに見て居る。

今日は何も無いが、こんど持つて來る、明日でも。……桔梗程好きな花は外に無い……

ひとり言のやうにつぶやくやうに言ふた。

桔梗や何か。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

女も口の中で言ふた、極めて桔梗を輕蔑したらしい調子で。

桔梗は嫌ひか、何が好き……何が。

また曼珠沙華をむしつてくゝり合せながら、

好きな花を言ひあてゝお見なさい。

玉枝はしばらく呼吸をはかつて、

お前の好きな花ちふのは女郎花ぢやろ。

違ひます。

そんなら萩か。

イヽエ。

朝顔。

首を振つた。

撫子。

又首を振つた。

少し考へて、

分つた〳〵、秋海棠。

とても中らんといふ顔付で默つて居る。

秋草ではないのかい。

今咲いて居るがなァ。

咲いて居つても人の知らぬ草ぢやないか。

誰でも知つて居るがなァ。

今迄立つて居た玉枝は我知らず其所へ腰を据ゑて、鞭を振り動かしつゝ、

分らん〳〵。江戸菊でもあるまいな。

默つて居る。

雞頭か知らん。

花束をくゝりたる絲の殘りを齒にて切りながら、首を振つた。玉枝は少しいらだつて來て、

何。何。到底分らん。

とせき込んで問へど、矢張默つて花をこしらへて居る。今しもやう〳〵のことで出來上つた花の塊(かたまり)、今度は桔梗の代りに曼珠沙華を藥玉の如く丸くしたるを嬉しげに打ち眺めては、絲にぶら

下げて見ては、又手に置いて見ては、終にそれを玉枝の鼻尖にぶらさげて、

此花ぢやがなァ。

玉枝は意外なのに驚いた。

それは葬禮花、死人花ぢやの言ふて、人のいやがる花ぢやないか。葉も枝も何も無うて、ぽんと立つて、墓原などに生えるもので、色と言や厭赤い、赤うても子供も取らん、それが好きかい、その誰でも嫌ふ花が。

そぢやけん、可愛がつてやるのぢやがなァ。

花の束を見つめて居た少女は少し力を入れて言ふた。沈んだる聲に悲しき調子を帶びて、一時出まかせの口の先の笑談とも聞かれなんだ。

みいさん。乘つて往かんか。

しばし話のとぎれたる此場の靜かさを破つて、此聲は聞えた。玉枝はうろたへて立ち上りながら振り返ると、彼方の畦道に童が牛を牽いて此方を向いて立つて居るのを見た。

鎌さんや。今戻りかな。今日はもう城下を歩行くのも厭ぢやし、内へ去んで叱られるのも厭ぢやしと、こゝにぐづ〳〵して日を暮して居つたのぢやが、乘せてくれるなら去なうかな。

花籠持つて起き上りたる少女は籠の底より一箇の花の藥玉、おのが手にあると同じやうなるを取り出し、それを前のと一寸程置いて連ね下げて、其絲を長く首に掛けた。二つの小さい藥玉は胸に下がつてゐる。女はうれしさうに我胸を下目で見ながら畦道へ出て往た。

お前、足を怪我したか。

鎌とやらが問ふた。

惡まれるとなると石に迄惡まれるけん。誰ぢやてゝ一人可愛がつてくれやせん。

少女はちよと笑みながら容易く牛の背へ後向に乘つて、童が下からさし出す我花籠を受け取つた。

みいさん方の叔父さんは、みいさんをどうして憎むかな、德さんは可愛がられるけんど。

牛追ひ〳〵歸り行く二人の話は玉枝に聞えぬ程に遠ざかつた。女の顏も見わけのつかぬやうになつた。胸に掛けて居る二つの勳章は夕日に映つて動いて居る。右へ曲つた。低い處へはひつた。小川を渉るのであらう。又高い處へ出た。動かぬやうに見える。夕靄は薄く立ち罩めて牛も人も只紫色に見ゆる時、玉枝は我家に懸けてある、白象に普賢菩薩の古畫を思ひ出した。

三

山本村は一年一度の鎮守の祭、それも去年と一昨年とは赤痢がはやつて祭は内祝ひ、神輿さへ舁かれぬとの達しで、極めて淋しかつた其の反動か、今年の景氣の盛んなことは譬へやうも無い程である。若い者は獅子舞の太鼓の稽古をする、年寄は淨瑠璃の下ざらへ、子供は縮緬の襦袢とさゝやかな鈴いくつとなく附けたる木綿襷とを拵へて、それを毎夜枕許へ置いて待つて居る。宵の祭も過ぎて翌の天氣はと氣遣ふた雲もいざ今日といふ日になれば何處へやら隱れて、朝から太鼓の音勇ましき一天快晴、飴屋菓子屋抔到る處に荷を卸して思ひの外の儲があつたらしい。

昔の庄屋でもあらうか、低き白壁を繞らして、大きな門構の内の廣き中庭に數十人の男女は集つた。此群集に取り卷かれて居る五十ばかりの男の頭は半分白髮になつて束ねられて、足には長刀草履を穿いて、帶は太い黑い繩のやうなもので三重も四重も廻してある。やがて彼男は其帶を解いて兩手にぶら下げると、驚くまいか、二匹の蛇になつた。蛇を持つた儘兩手を擴げて、見物の前を見せ歩行くと、今迄何やら知らずに來て居た女などは肝を潰して逃げ出したのもある。一

廻り廻りて蛇使が元の處へ歸つた時は、人の輪が前よりは廣くなつて居た。男は思ふまゝに蛇を使ふて見せた。或は手を絞めさせて見せた。首を絞めさせて見せた。それから二匹の蛇を繩によつて見せた。二匹の蛇を繋いで襷に掛けて見せた。終には二匹とも懷へ入れてしまふて、まだ一匹帶にして居たのも解いて懷へ入れた。何處から蛇が出て來るやら分らぬので半ば後しざりしながら、皆注意して居たが、蛇使は立つた儘で蛇は何處からも出なんだ。出ないのが猶氣味惡くて、見物は心の內で心配して居ると、一人が、

アレ。

と叫んだ。よく見れば蛇使の首のぐるりに三匹の蛇は僅かに頭ばかりを出して、べろ〳〵と赤い舌を見せて居る。ぞつとしてそれとなく襟をかき合せて居る女の顏の色は無い。變な聲を出して男が頭を叩くと蛇は三匹とも頭の上にあがつてとぐろを卷いて居る。やがてそれを引張り下して右の手でつかまへてしまふた。藝が終ると、蛇使は先づ貫ふた錢を帶の間から手を入れて何處かへ納めて、一匹の蛇を又帶に結んだ。今一つの蛇を頭へぐる〳〵と鉢卷に卷かせて、殘る一つの尾を左の手に攫んでぶら下げ、門を出かけた。群衆は我先にと逃げ出して急に淋しくなつたが、猶少しは後から附いて行く者もある。遠くから恐い者見たさに見て居る者もある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.